

学長就任にあたって

東京芸術大学長 平山 郁夫



私は、平成七年十二月二十日、六年間の学長任期を終えて退官しました。六年後、思いもかけず再び東京芸術大学長に就任することになりました。

今、国立大学は、独立行政法人化を控えて、大学改革のただ中にあります。学長退官後のこれまでの活動を通じて、外部から客観的に大学を見ることのできた私に、再登場の白羽の矢がたったのでしょうか。私は、母校に育てられたご恩返しのお気持ちから、引受けました。

大学改革は、トップダウンによる形式でなく、本来なら時代に沿い、自らの努力で教育研究の充実を図っていかなければなりません。

戦後の新制大学教育や制度も、半世紀を過ぎた今、さらなる改革が求められています。とくに、芸術創作の教育研究の場として、大学教官が、自ら成果を上げるよう自覚することが重要です。伝統的に芸術大学は、多くの優秀な人材を出すことにより、トップとしての研究業績を示してきました。

現在、立派な施設環境が整備され、過去一〇〇有余年の歴史の中では最も充実しています。設備に加えて、教育研究の最高水準であり続けるためには、教官の質向上と自覚が不可欠です。これを実現できる制度が求められています。本来、制度の前に、我々が行動することが当然の義務であり、本学の将来のためだと、強く感じています。新しい文化の歴史を全学一致で築きたい、と願っています。